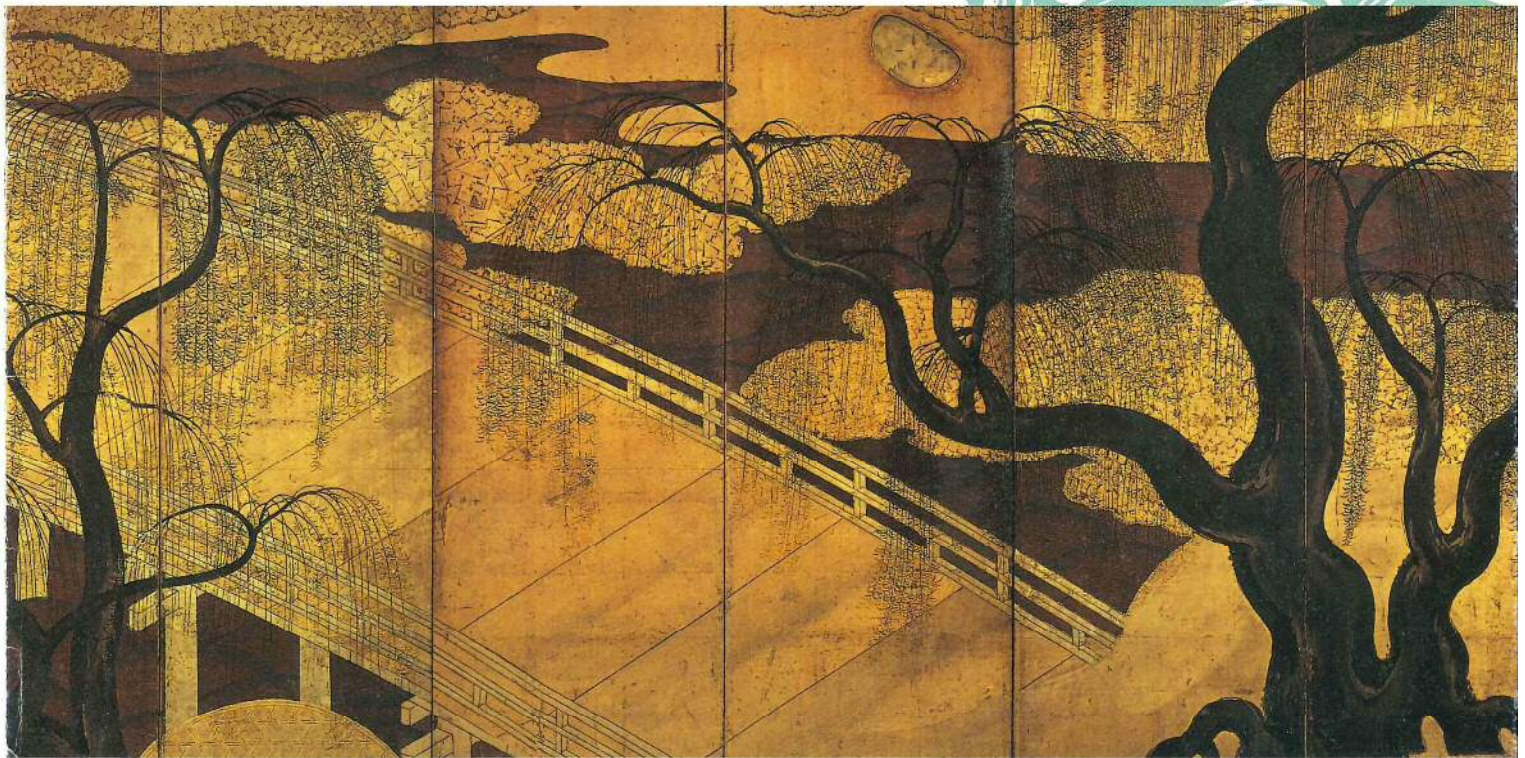


千有余年の歴史に息吹く

平成の
宇治橋



✿ 京都府

宇治橋を巡る歴史

古代



宇治橋創建

「宇治橋断碑」放生院(橋寺)蔵
 上部の3分の1を残し、欠失した状態で発見されたことから、断碑と呼ばれるこの石碑は、宇治橋が大化2年(646)、奈良元興寺の僧侶・道登によって架橋されたことを伝えています。



中世

「橋合戦図」林原美術館蔵
 江戸時代に描かれた「平家物語の橋合戦」に象徴されるように、宇治橋は幾多の歴史の舞台でもありました。



「石山寺縁起」石山寺蔵

鎌倉時代後期に描かれたもので、宇治橋をあらわす現存の絵画ではもっとも古いものです。当時の宇治の景観や人々の生活などがしのべられます。

源氏物語 ～宇治十帖～

源氏物語の最後の章である宇治十帖は、宇治を主な物語の舞台とし、「橋姫」にはじまって「夢浮橋」で幕を閉じます。この橋から橋への物語は、まさに宇治橋の存在を抜きにしては成り立たないでしょう。宇治橋は平安のロマンを秘めて、人々を幻想世界へと誘うかのようにこの地にたたずんでいます。

「源氏物語絵巻「橋姫」」徳川美術館蔵



「源氏香図」宝鏡寺蔵



江戸時代初期に考案された「お香遊び」の文様

近代



明治39年（1906）以前



明治39年～明治45年（1906～1912）



大正元年～大正14年（1912～1925）



大正14年～昭和9年（1925～1934）



昭和11年～平成8年（1936～1996）

京都と南都（奈良）を結ぶ古北陸道（後の奈良街道）の交通の要衝に架けられた宇治橋は、創建以来千有余年の歴史のなかで、洪水による流失と再建をくり返して現在にいたっています。明治以降も、往時をしのぼせる外観・形状が引き継がれ、架け替えられてきました。このことが、景勝の地・宇治にあって「瀬田唐橋」、大山崎の「山崎橋」とともに古代には日本三大橋のひとつに数えられ、時を経た今でも貴重な財産となっています。

宇治茶と宇治橋

宇治橋を出発地とする「お茶壺道中」は、江戸時代に将軍が飲むお茶を宇治から江戸に運ぶため、毎年おこなわれていた風物詩でした。

ズイズイズッコロバシゴマミソズイ
茶壺に追われてトッピンシャン
抜けたらドンドコショ

と歌われている童謡は、沿道に住む人々が、通りすぎる行列にあわてふためくようすと、過ぎたあとのはやしたてるようすを伝えています。



『宇治茶つみの図』 今日庵文庫蔵

歴史にかおる雅のみち — 平成の宇治橋

千有余年の歴史と文化を伝え
自然にとけこむ景観を後世に残す架け橋

● 特 徴

- こう高 らん欄 国産桧を使用した安土桃山時代の様式
- ぎ擬 ほ宝 し珠 現存する寛永13年（1636）作のものをモデルとした形状
- さん三 まの ま間 銘水を汲み上げた故事を継承する張り出し部
- けた橋脚・け桁かくし 伝統的な木橋の姿をイメージする鳥居形状と袴板
- りゅう流 ぼく木 よ け 伝統的漁法であった網代（あじろ）をつなぎ止める網代木をイメージする形状
- 歩 道 自然石を使用した歴史回廊の径（みち）となる人にやさしい歩行空間
- 植 栽 茶のまち・宇治のシンボルである宝木（茶の木）を植栽

三の間



左岸から三つ目の径間に位置することから名づけられたといわれる三の間は、古くは橋姫をまつるためにつけられたとも伝えられています。宇治茶が天下無双の茶（本茶）といわれるまでの成長期に深いかわりをもっています。なかでも、茶事を好んだ豊臣秀吉が、ここでお茶の水を汲ませたという話は有名です。現在でも、このような故事にちなみ、毎年10月におこなわれる宇治茶まつりには、この三の間から宇治川の水が汲まれ、その歴史が継承されています。

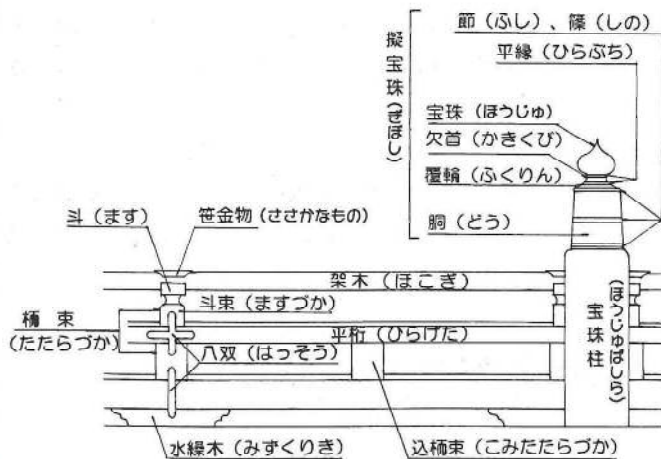
高欄・擬宝珠

宇治橋の姿を象徴する擬宝珠は、安土桃山時代に修復された形状が定着しているものであり、これを継承することとしました。高欄は、防腐処理をした国産桧を使用して木材の自然色を生かし、擬宝珠についても青銅で色調を整えて、寛永13年（1636）の架橋時に設置された形状と大きさに合わせています。



『宇治橋擬宝珠』宇治市歴史資料館蔵

寛永13年(1636)の架橋時に設置された擬宝珠です。当時22あった最後のひとつで、現存する宇治橋擬宝珠でも最古のものです。擬宝珠の設置年代のほかに、宇治橋の度重なる流失・破損時の修復年代を示す承応2年(1653)、寛文12年(1672)、元禄11年(1698)の刻銘があり、平成の宇治橋において、擬宝珠のモデルとなっています。



● 擬宝珠の歴史 ●

擬宝珠はもともと塔頂を飾る宝珠から派生し、装飾を目的としたものですが、高欄の柱を腐食から守る役割も果たしています。橋の高欄に施される擬宝珠は、一般には格式の高い橋のみにあったようです。

宇治橋の擬宝珠が確認できる最古の資料は、鎌倉時代後期に描かれた『石山寺縁起』です。なお、現存する最古の擬宝珠は、平安時代後期に建てられ、世界文化遺産にも登録された宇治上神社本殿内部にあります。



大版の御影石を使用した歩道



自然石を使用した植樹樹と茶の木

宇治橋の景



石灯籠をイメージしたフットライト



木橋の姿をイメージした橋脚・桁かくし

「ちはやびと 宇治の渡りの はやし瀬に 逢はずありとも 後はわが妻」(柿本人麻呂・万葉集)と歌われた宇治川の川面は、今も変わらない姿をとどめ、「宇治の渡し」は、朝霧立つ中の島をはじめ、春の桜、秋の紅葉と、四季を通じて訪れる人々に親しまれています。

単に交通機能の役割を果たすだけでなく、このような豊かな自然景観を楽しみながら安全で快適な散策ができるよう、橋の上流側には幅広の歩道を設けるとともに、歩道部は桧づくりの高欄と調和する自然石を使用しています。和風調のイメージを創出し、周辺の名所・旧跡を結ぶ歴史回廊の径(みち)として、橋面デザインに工夫をこらしています。

「宇治の渡し」の四季



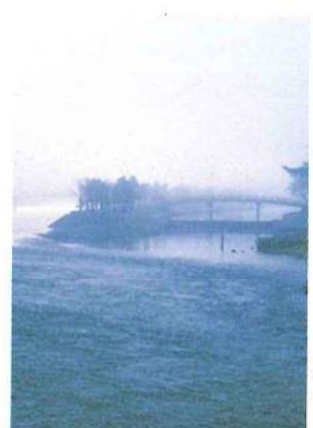
春●宇治川桜まつり



夏●宇治川花火大会



秋●宇治茶まつり



冬●朝霧の中の島